白鷗大学発達科学部論集　第２巻　第２号

研究ノート

少年鑑別所収容中学生を対象とした現実・選好フォームによる学級環境評価の試み

平　田　乃　美

Perceptions of Actual and Preferred Classroom Environment Among Japanese Juvenile Delinquents at Junior High School Level

HIRATA Sonomi

１．はじめに

平成17年度犯罪白書（2005）によれば、少年刑法犯検挙人員（触法少年の補導人員を含む）は、昭和61年以降10歳以上20歳未満の少年人口が減少傾向にあることを反映して減少傾向にあり、平成16年は19万3,076人となっている（前年比5.2％減）。また、昭和58年以降の少年一般刑法犯検挙人員の学職別構成比では、58年に42.2％と最も高い比率を占めていた中学生の比率が徐々に低下して、63年に高校生の比率が中学生を上回って以降は高校生が最も高い比率を占めており、平成15年は43.4％となっている。

法務総合研究所（2001）の調査によれば、全国少年院の中間期教育課程生2,323名の家族状況では実父母がそろっている家庭は49.8％に過ぎず、同世代の少年たちに対して低い。同白書（2005）は、非行少年の多くが学

業の不振やいじめ等の理由によって早期に学校生活からのドロップアウトを経験して、地域社会にも溶け込めないまま、同じような境遇の仲間と結び付きを強めて非行に走る現状を示し、彼らが学校にも地域社会にも所属意識を持てないでいることの問題を指摘している。

家庭機能の要因は、古くから学校や地域文化からの逸脱、非行の原因として研究されてきた。一方、学習効果や問題行動における子どもの学校環境に対する知覚・認知を重視する立場は、社会心理学者によるグループダイナミックスの「集団の雰囲気」研究にその根源をもち、やがて、Murray（1938）の欲求－圧力モデルを基盤とする社会的風土の研究として発展を遂げた。環境圧力の理論を基盤に、Moos（1974）は、人間行動に効果をもつ基本的な環境を３次元と仮定した（図１参照）。欲求－圧力モデルを基盤とした人間の環境適応に関する研究は多く、例えば、Stern（1970）は、現実環境と選好環境に対する認知の一致と学力の関連を報告している。同様に、Hunt（1975）の人間－環境適合説を根拠として、Fraser & Fisher（1983）らも現実の教室において子どもが受けている学校環境からの圧力の測定値（Actual）と、彼等が好ましい、快適であるとする欲求の測定値（Preferred）を一致させることで、教育効果が高まることを見い出している。また筆者ら（平田・渡邊、2005）も、首都圏の大学生を対象にした調査において、学生の授業環境に対する評価が、学業成績よりも選好環境に対する期待値の程度によって有意に異なることを報告している。

上述の通り、子どもの学力達成度と人間－環境適合説の関連については、既に多くの関連が検証されている。本研究ノートは、この人間－環境適合説を子どもの問題行動への適用を試作的に検討するものである。具体的には、非行少年が学校生活から逸脱する契機となりうる学校環境要因の探索を目的として、学級環境および周辺人物の評価・測定を試みることとする。

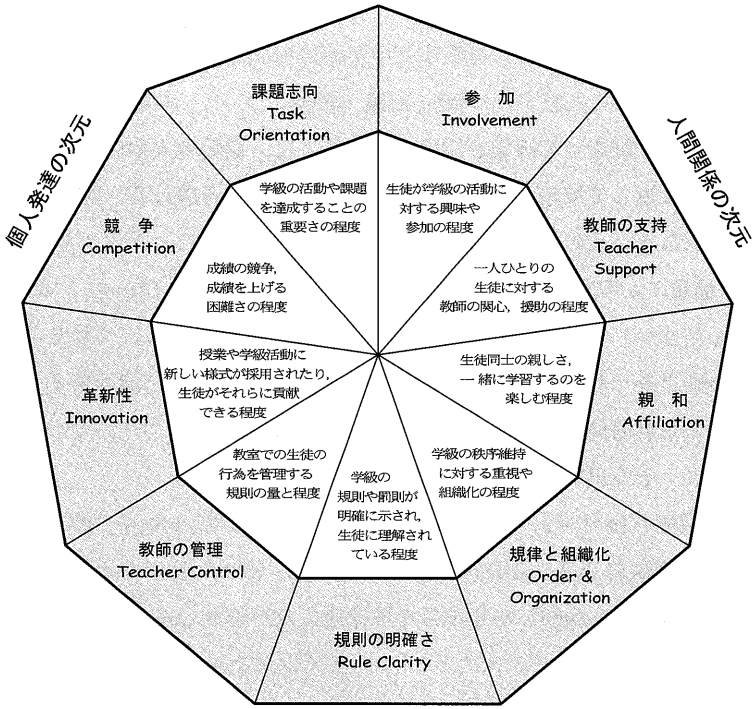

図１　Moosが提唱した人間環境の基本３次元に基づく９つの学校環境測定尺度（Trickett ＆ Moos, 1973）

２．方法

調査対象：少年鑑別所収容中学生（有効回答数87名）、および首都圏の公立Ｓ中学校２年生５学級（有効回答数121名）。

調査時期：2004年11月。

調査方法：少年鑑別所については担当教官、中学校についてはクラス担任教諭より、調査は無記名式であり回答内容が成績・処遇に関係することは一切ない旨を生徒に対して説明の上、実施された。

調査内容：

【周辺人物に対する評価】在籍する中学校に配属されたスクールカウンセラー（以下、ＳＣと記す）・両親・友達・教師について、「相談相手として」の人物評価に限定して評定を求めた。生徒には、複数の人物について同一項目を繰り返して評定してもらうため、その負担を考慮して、評定項目は最小限となるよう吟味して設定した。具体的には、ＳＣ・両親・友達・教師の5種類の人物について、相談相手としてどのような存在かを、［身近で相談しやすい］［親身になって聞いてくれる］［秘密を守ってくれる］［役に立つ助言をくれる］［話を聞いてもらった後で気分がすっきりする］［相談すると余計面倒になることもある］の６項目を用いて、「１．そう思う」から「５．そう思わない」の５件法で評定してもらった。

【学級環境評価尺度】学級環境尺度（CES;Trikett & Moos, 1973）の複数の日本語訳修正版（CESJ；Hirata & Sako, 1998, Hirata, et al., 2001, Hirata & Fisher, 2003）から項目を取捨選択及び追加した40項目（以下、学級環境尺度と記す）について、「１．あてはまる」から「５．あてはまらない」の５件法で評定してもらった。

３．結果と考察

【周辺人物に対する評価】

(1) 評価項目の因子分析

中学生にとって、ＳＣ・両親・友達・教師が「相談相手としてどのような存在か」というイメージの構造を探索するため、対象生徒208名の５項目の評定値を用いて因子分析（主因子法、varimax回転）をおこなった。因子の解釈可能性を基準として、「親身・身近さ」「秘密の保持」「相談の有益性」の３因子を抽出した。3因子の累積寄与率は、79.8％であった。便宜的に各因子の成分負荷量は.600以上を基準とした。分析には、統計解析ソフトウェアは、SPSS11.0 for Windowsを用いた。

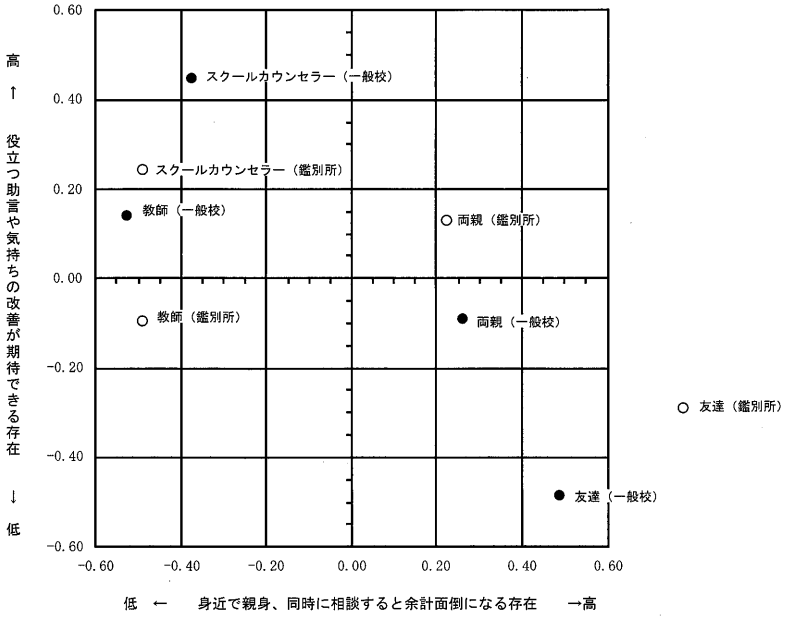

図２　少年鑑別所収容中学生のスクールカウンセラー・教師・親・友達の「相談相手としての」人物評価

(2) 人物イメージの座標軸上のプロット

結果を視覚的に表現するため、ＳＣ・両親・友達・教師についての因子得点の平均を、「親身・身近さ」をＸ軸、「相談の有益性」をＹ軸としてプロットしたものが、図２である。

図２では、相談相手としての人物評価においては、少年鑑別所収容中学生が、ＳＣは相談することによる気持ちの改善や役立つ助言が最も期待できる存在として意識されていることが示されている。実際の学校生活においては、ＳＣの利用経験がない多くの生徒も「こころの専門家」というＳＣの専門性に対する期待は高いと云える。同時に、図２では生徒からは教師・ＳＣが比較的近似したイメージで捉えられていることも示唆されている。

【学級環境評価尺度】

(1) 評定項目の因子分析

学級環境尺度40項目の因子的妥当性を検討するため、208名に実施したデータを用いて因子分析（主因子法 Varimax回転）を行った。因子の固有値が1.00以上であること及び解釈可能性を基準として、５因子構造を妥当として抽出した。抽出された５因子22項目の分散は全分散の48.0％であった（Table 7)。

第１因子は、「先生が生徒を信頼して任せてくれる」「先生が生徒を支援するためなら、いろいろなことをしてくれる」「先生が一人ひとりの生徒に関心を持っている」等、教師の生徒に対する援助・支援に対する項目から構成されたため「教師のサポート」と命名した。第２因子は、「クラスで自分が一人ぼっちだと感じることがある」「ときどきクラスのみんなに受け入れられていない感じがする」等、「学級での孤独感」に関する項目群で構成された。同様に、構成された項目内容から、第３因子は「授業態度」、第４因子は「学級の規律・結束」、第5因子は「学業の負担」と命名された。

抽出された５因子の信頼性を検討するため、各因子の信頼性係数 Cronbach' α を算出したところ、表１の通りの値が得られた。なお、因子分析に用いたデータは現実フォームを用いたデータであるが、同様の因子構造を当てはめて選好フォームについても信頼性係数を算出した。表１から、各尺度は内的整合性の観点から一定の信頼性をもつと考えられた。

表１　学級環境評価尺度の因子分析結果（回転後）

No.	ITEM	Factor Loadings I	II	III	IV	V
第 I 因子　教師のサポート						
No. 10	先生の指示や言っていることが、わかりやすい	**0.802**	-0.229	-0.071	0.010	0.107
No. 28	先生が、生徒を信頼して任せてくれる	**0.720**	-0.001	-0.073	-0.115	-0.077
No. 30	先生の言うことに、いつもだいたい納得できる	**0.715**	0.079	-0.049	-0.069	-0.055
No. 13	先生が、生徒を支援するためなら、いろいろなことをしてくれる	**0.712**	-0.020	0.116	-0.216	0.108
No. 03	先生が、生徒にとことん付き合ってくれる	**0.700**	0.030	0.060	-0.067	-0.010
No. 18	ほとんどの生徒は、先生と個人的に話をする機会がある	**0.699**	0.114	-0.161	0.037	0.067
No. 08	先生が、ひとり一人の生徒に関心をもっている	**0.474**	-0.139	0.191	0.136	0.021
第 II 因子　学級での孤独感						
No. 11	クラスで、自分がひとりぼっちだと感じるときがある	0.045	**0.821**	-0.031	-0.070	0.150
No. 06	時々自分がクラスのみんなに受け入れられていない気がする	-0.018	**0.802**	-0.102	-0.077	0.033
No. 26	私は、自分のクラスにたくさんの友達がいる	-0.073	**-0.692**	0.008	-0.106	-0.042
No. 16	クラスに参加するのが、楽しい	0.218	**-0.684**	-0.056	-0.151	0.050
No. 01	クラスに、うちとけにくい雰囲気（ふんいき）がある	0.031	**0.615**	0.143	0.108	0.129
No. 31	課題の実行のために、生徒が数人のグループを作ることが、かんたんだ	0.061	**-0.448**	0.245	0.227	-0.201
第 III 因子　授業への態度						
No. 09	授業中、居眠りや考えごとをしている生徒がいる	-0.036	-0.051	**0.744**	0.021	0.076
No. 38	授業中、生徒はいつも静かにしている	-0.031	0.017	**-0.674**	-0.141	-0.056
No. 17	授業の進む速さに、ついていけない生徒もいる	-0.015	0.124	**0.565**	0.089	0.302
No. 04	生徒が、授業が早く終わらないかと時間ばかり気にしている	-0.332	0.098	**0.443**	0.147	0.103
第 IV 因子　学級の規律・結束						
No. 19	自分のクラスは他のクラスより「もめごと」が起こりやすい	-0.142	0.014	0.057	**0.897**	-0.029
No. 29	クラスで、よく「さわぎ」や「もめごと」が起こる	-0.043	0.007	0.191	**0.849**	0.048
No. 40	クラスで、生徒同士が分かり合う機会が少ない	-0.078	0.351	-0.094	**0.479**	-0.115
第 V 因子　学業の負担						
No. 12	少し勉強をさぼっていると、すぐに成績が落ちてしまう	-0.054	0.146	0.137	-0.126	**0.776**
No. 07	授業を休んでしまったら、追いつくのがたいへんである	0.129	0.184	0.146	0.088	**0.763**
Eigenvalue		5.85	3.73	3.17	2.53	1.71
Variance (%)		0.15	0.09	0.08	0.06	0.04
Cumulative variance (%)		0.15	0.24	0.32	0.38	0.48
【現実の学級環境】 Cronbach's α coefficients						
一般中学生		0.85	0.54	0.62	0.72	0.64
少年鑑別所収容中学生		0.87	0.84	0.56	0.63	0.63
【選好する学級環境】 Cronbach's α coefficients						
一般中学生		0.84	0.83	0.71	0.71	0.69
少年鑑別所収容中学生		0.90	0.85	0.76	0.74	0.72

* Factor loadings with absolute values of <.40 are not presented for the sake of clarity.

(2) 選好・現実フォームによる学級環境評価

少年鑑別所収容中学生および一般中学生の現実・選好の学級環境に対する評価の関連を検討するため，所属（少年鑑別所・一般中学校）と評価対象（現実・選好）を要因とした２要因分散分析を行った。

結果では、少年鑑別所・一般中学校の生徒ともに、現実の学級環境で得ているよりも多くの教師の支援、肯定的な生徒の授業態度や学級の規律・結束、学業の負担の軽減等を求めていることが示された。教師の支援、授業態度、学業負担の軽減の要因においては所属による交互作用が認められたことから、傾向の程度は少年鑑別所群でさらに顕著であることが示された。このことから、少年鑑別所収容中学生は、一般中学生以上に、学校生活における現実環境と選好環境に大きな差異を認知していることが検証された。

4．まとめ

本研究ノートの目的は、人間－環境適合説を子どもの問題行動への適用を試作的に検討することであった。本研究において実施された少年鑑別所収容中学生及び一般中学生を対象とした調査データの分析結果からは、選好・現実フォームによる学級環境評価の測定値が、特定の因子において異なっていることが示された。また、一般中学生と少年鑑別所収容中学生の学校環境評価における有意な差異も認められ、これらの知見は、非行少年の学校逸脱の理解につなげられる可能性がある。本稿中で触れなかった調査項目を含め、今後更に詳細な分析をおこなう必要がある。

Fraser & Fisher (1983) は、Hunt (1975) の人間－環境適合説を根拠とした選好・現実フォームによる中学生の科学クラスを対象とした学級環境調査において、次のように述べている。学習環境における選好と現実の一致は、子どもの学力達成度において学級の現状と同程度に重要である。教師が生徒にとっての選好環境と現状を近似させる方向に学級を変化させ

るならば、その学級における学習効果は高めることができるに違いない。しかし、逆に子どもを自身の選好に近似する環境に転級させることで同じ効果を得ることはできないだろう、と。彼らの主張は、学習者のニーズを満たした教育環境の整備だけではなく、学級を運営する教師と子どもの日々の学級における相互作用の重要性をも同時に示唆していると云えるだろう。従来の選好・現実フォームによる環境評価研究においては、主として子どもの学業成績や学力達成度が教育の成果として取り上げられてきた経緯がある。しかし、本稿の試みで示唆された結果からは、非行行動を示す子どもの環境評価は一般の子どもとは有意に異なった傾向を示していた。従って、本評価尺度は矯正教育においても活用できる可能性が考えられ、今後も調査研究の継続が必要であるだろう。

［付記］

本研究は、平成17年度文部科学省科学研究費補助金若手研究（B）「非行少年の個性理解と早期指導に役立つ学級環境尺度の開発（課題番号15730385 研究代表者：平田乃美)」の助成を受けておこなわれた。本稿は、平成17年度調査の中間報告として作成された。

［謝辞］

平成15・16・17年度文部科学省科学研究費補助金研究においては、白鷗大学兼任講師元法務省辻田晶計先生、今村洋子先生、東京少年鑑別所首席専門官大浦宏先生、日本大学文理学部渡部正先生に、温かい御指導と多大な御助力を賜わりました。厚く御礼申し上げます。

引用文献

犬塚石夫（2004）矯正心理学－犯罪・非行からの回復を目指す心理学－上巻理論・下巻実践編、東京法令出版。

Fraser,B.J. & Fisher,D.L. (1983) Use of Actual and Preferred Classroom Environment Scales in Person-Environment Fit Research. Journal of Educational Psychology, 75 (2), 303-313.

Hirata, S. & Fisher, D.L. (2003) Chapter 17: Students and Teachers' Perception toward Actual and Preferred Classroom Environment in Japanese Junior-High School. -The Potential of Psychological Measures in Classroom-, Technology-rich Learning Environments: A Future Perspective. In Khine, M.S., & Fisher,D. (Eds), World Scientific. Singapore.

平田乃美・渡邊亮子・野嶋栄一郎（2005）子どもの周辺人物イメージと学級環境評価【2】－「相談」という行為に対する捉え方に着目して－、日本心理学会第69回大会発表論文集、1406。

法務総合研究所（2005）平成17年版犯罪白書。

法務総合研究所（2001）児童虐待に関する研究　第一報告、法務総合研究所報告11、10-21。

Hunt, D. E. (1975). Person-Environment interaction: A challenge found wanting before it was tried. Review of Educational Research, 45, pp.209-230.

Murray,H.A. (1938) Explorations in Personality. New York: Oxford University Press.

Stern,G.G. (1970) People in Context. New York: John Wiley & Sons.

Trickett,E.J. & Moos,R.H. (1973) Social environment of junior high and high school classrooms. Journal of Educational Psychology, 65,1, 93-102.

渡邊亮子・平田乃美・野嶋栄一郎（2005）子どもの周辺人物イメージと学級環境評価【1】－「相談相手」としてのスクールカウンセラー・教師・友達・両親－、日本心理学会第69回大会発表論文集、1405。